

# 「もうひとつの生活技術論」としての民俗学

——都市民俗学と経世済民——

小林 忠 雄

1 都市民俗学の前提

3 もうひとつの生活技術論

2 伝統都市の民俗

4 都市民俗学と経世済民

## 論文要旨

近代以降の都市には都市の環境がつくり出した新たな民俗がある。これをとりあえず「都市の生活技術伝承」と仮称すると、例えば金沢などではワリイケ（割り井戸）とかタイナイグリといった事例がある。都市民俗学が問題とするのは、都市の住民の移動や稼業の盛衰が著しいために、ムラ社会と違って伝承母体が分立しているために年中行事や民間信仰、俗信といった民俗が個々に展開している。従って、都市が経済の修羅場で、市場の論理を貫く所であるとするならば、人より先んじた情報や世間話が重要となる。

1970年代から E. F. シューマッハが唱えた、近代の巨大技術では捉えきれない「もう一つの技術」がヨーロッパのコンセプトを支配した。これを都市民俗学にあてはめると、地方都市における独自のライフスタイル（生活技術）の在り方が模索されるであろう。

単なる町起こしには問題があるが、例えば、かつて各地で生活の合理化によって失われた町名を復活しようという運動においても、町名を科学する姿勢がなければ問題であり、そこには民俗の変容をさぐる意味での都市民俗学の在り方が考えられる。

最近の新聞情報によると、都市や近郊農村の家族事件として親の子殺し、登校拒否、家庭内暴力等々があげられるが、そこには俗信や新興宗教のトラブルによる原因のものが数多くみられる。さらに、老人の「ぼっくり死」願望などの流行現象においても、その背景には巨大技術社会への混乱と、社会の抑圧に抗しきれない弱者の精神的破綻、あるいは共同体社会の崩壊といった要因が見え隠れしているように思える。

柳田國男が意図した経世済民の学として、今日の民俗学がどれほど役にたっているかは疑問だが、都市が人工的になればなるほど、人々はよりナチュラルな環境や生活リズムを求めるもので、そのような社会的要求に、常に民俗学は答えるべきであろう。